

※展覧会の名称は変更する場合があります。

ぎをん 斎藤コレクション ー布の道標ー
古裂に宿る技と美

Fabrics Tracing Passageways : Textiles from the SAITO Collection

平成29年6月17日(土)－8月20日(日)

プレスリリース

細見美術館

ぎをん 齋藤コレクション 一布の道標— 古裂に宿る技と美

Fabrics Tracing Passageways : Textiles from the SAITO Collection

平成29年 6月17日(土)ー8月20日(日)

*一部展示替有り

細見美術館

〒606-8342
京都市左京区岡崎最勝寺町6-3
TEL075-752-5555・FAX075-752-5955
<http://www.emuseum.or.jp>

開催要綱

江戸時代から京都・祇園に店を構え、2013年に創業176年を迎えた京呉服の老舗「ぎをん 齋藤」。

自らが作り手である7代目、現当主の齋藤貞一郎氏は、染織コレクターとしても知られた存在です。蒐集品に学んで精力的に古典の技法や意匠の復刻に取り組み、その成果は現代のきもの制作に活かされています。

本展は、中国唐代に遡る貴重な遺品や、民間に流出した正倉院裂としては最大級の発見として近年、話題を呼んだ「唐花文錦」を筆頭に、中世の綾・錦から近世の辻が花や慶長裂、友禅、そして渡りの更紗まで、東洋染織史を概観することのできる華麗な染織芸術品の数々を紹介するものです。

クリエイターであり数寄者でもある齋藤氏の、深い憧憬と飽くなき探求心によって集められたコレクションを通して、裂々に凝らされた技と美、その尽きせぬ魅力にふれていただけれることでしょう。



古裂とは

ひとが身にまとう、また身の回りを飾るための染織品は、単にその機能を果たすだけでなく、用いる人の趣味や人格をも表わします。ことに幾世を経て今に伝わる染織遺品は、その時々最高の素材や技術を駆使して生み出され、権威や富を象徴するものです。本来の役目を終え、今や小さな断片＝裂くぎれとなっていても、ひとつひとつ人々の叡智と美意識が結集した文化の証として在ります。

日本では、こうした染織遺品が「古裂くぎれ」とよばれ、永く大切に愛で伝えられてきました。茶の湯の世界をはじめとして、美術工芸品を守り、引き立てるだけでなく、裂それ自身を芸術品として鑑賞する文化が培われたのです。

基本情報

主催
細見美術館 京都新聞

休館日
毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)

特別協力
ぎをん 齋藤

開館時間
午前10時～午後6時
(入館は、午後5時30分まで)

協力
関西学院大学博物館

会場
細見美術館

監修
河上繁樹氏
(関西学院大学文学部 教授・関西学院大学博物館館長)

お問合せ先
担当学芸員:伊藤京子 gakugei@emuseum.or.jp
広報担当:三宅由紀 kouhou@emuseum.or.jp

入館料
一般 1,200円(1,100円)
学生 1,000円(900円)
※()内は20名様以上の団体料金

Textiles from the SAITO Collection

Fabrics Tracing Passageways

主な出品作品



唐花文錦【からはなもんにしき】

奈良時代(8世紀)

ぬきいと
紫地に黄色の緯糸で唐草円文風の主文と菱形に構成された副文を織りだした錦。

同種の錦は東大寺大仏開眼会(752年)や聖武天皇一周忌斎会(757年)でも使用されており、8世紀中頃に織られたものとされる。また、正倉院に伝来する屏風の表装にも同種の錦が見られる。

この錦は天満宮御影の掛幅の中廻しと風帶の裂と伝えられており、伝来詳細は不明ながら、民間に流出した正倉院裂としては最大級の錦。



松桜に色紙形文繡箔【まつさくらにしきしがたもんぬいはく】

桃山時代(16世紀)

もとは肩裾を州浜形に区切った繡箔小袖で、右側の裂はその左肩部分、左側の裂は右袖となる。背の文様は常盤の松に満開の桜、さらに海松にサザエやアワビ、ハマグリなど貝があらわされた春爛漫の文様と、色紙形をちらした秋から早春にかけての季節をあらわす文様とが、身頃の左右で片身替に対比される構成であったと思われる。



花文辻が花染【はなもんつじがはなそめ】

室町～桃山時代(16世紀)

ねりぬき
紫の練貫地に、絞り染による白上げで花文を散らした小袖裂。

紫根によって染められているので、高級な小袖であったと思われる。文様は、山桜のような五弁の花と葉。花や蕾の帽子絞り、葉の輪郭や葉脈、蕾の茎を縫い締めで白く染め残してある。こうした絞り染は室町時代から桃山時代の小袖に流行し、現在ではこれを辻が花染と呼ぶ。



岩に百花文慶長裂【いわにひやっかもんけいちょうぎれ】

江戸時代(17世紀)

絞りであらわした岩の間に、松や梅の吉祥の樹木、桔梗、萩、女郎花、撫子などの秋草を刺繡であらわし、さらに薦の紋が散らされている。

桃山から江戸時代初期にかけて、小袖の文様は小柄になる。この小袖裂もその傾向があらわれており、また赤地に岩を黒くした配色は、いわゆる慶長小袖の特色を示している。